平成24年7月1日発行　第43巻 第7号　毎月1回1日発行　昭和46年1月27日第3種郵便物認可
ISSN 0385-2229

月刊 地域保健

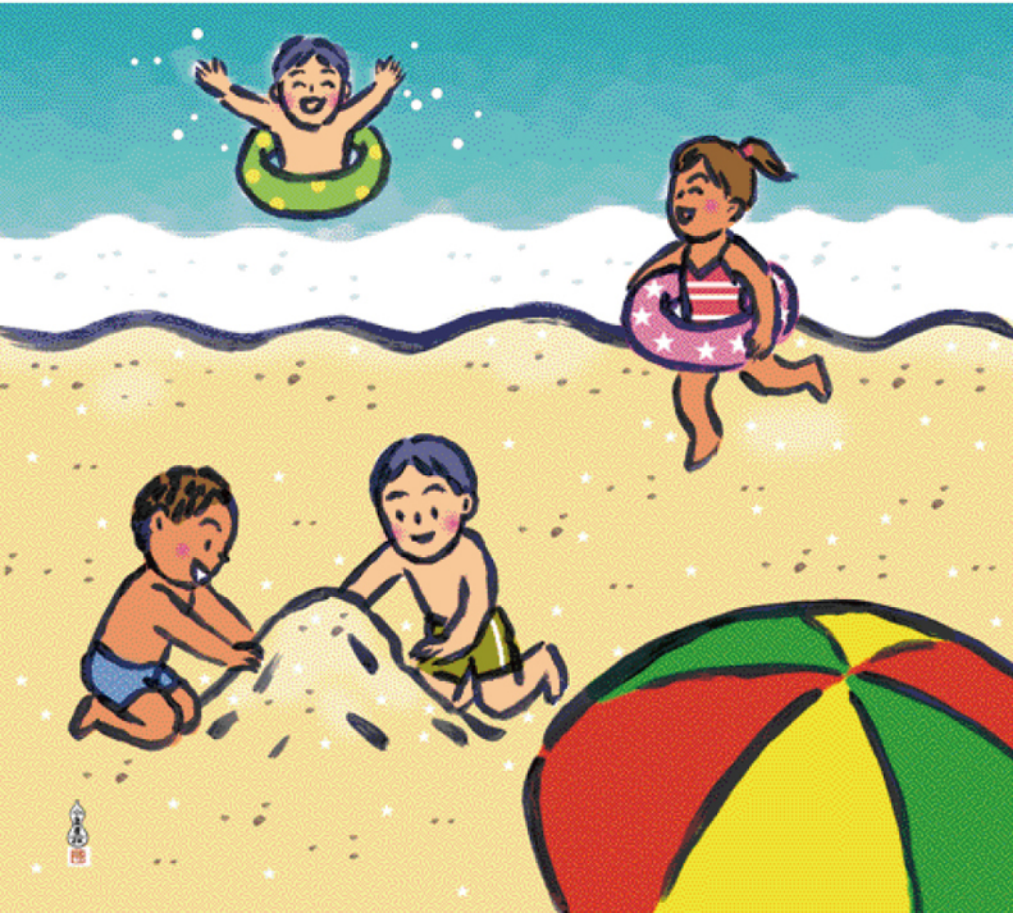
7
2012

●特集

統括保健師に求められるもの
―機能・役割・行政内の位置づけは？

●フロントランナー　佐竹登志子さん《米原氏健康福祉部長 兼 福祉事務所長》

●ピープル　森川 清さん《東京災害支援ネット代表、弁護士》



FRONT RUNNER

「次期健康日本21計画づくりは力量アップのチャンス」

パワーポストにある保健師の歩みと素顔、未来のビジョン

滋賀県米原市

佐竹登志子さん

●米原市健康福祉部長 兼 福祉事務所長

文：編集部　写真：カミヤス セイ

日本看護協会の調査によれば、全国で課長級以上の保健師は4・8％、部長級となるとわずか0・4％である（平成22年度厚生労働省先駆的保健活動交流推進事業「保健師の活動基盤に関する基礎調査」報告書）。滋賀県米原市で保健福祉部長を務める佐竹登志子さんは、その数少ない一人。今月のフロントランナーは、パワーポストに就き統括的な立場にある保健師の素顔に迫り、ビジョンを聞いた。

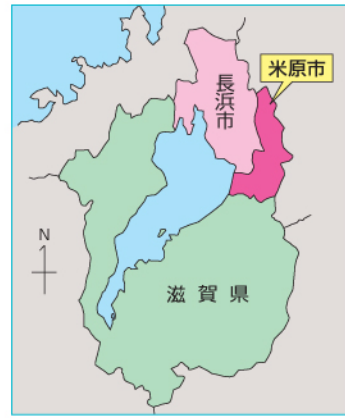
自分は人生に遅れている!?

佐竹さんは米原市の北隣、長浜市の出身。高校は地元の進学校に進み大学進学を目指したが、担任から「あなたは看護師に向いているから看護学校に行ったらどうか」とのアドバイスで、特に深く考えず看護学校に進んだ。看護師になる覚悟があったわけではなく、途中で向いていないと分かったら大学受験をし直せばいいという軽い気持ちだったという。

ところが、看護学校入学は人生観を大きく変えた。

「私が通っていた高校では3年間を受験勉強に費やすのが普通でした。でも看護学校に来る学生たちは、学業以外にも音楽活動やアルバイトなどでいろいろな人生経験を積んでいます。社会人になってから入学してくる人もいます。『一流大学に進むだけが人生じゃない。世の中には、いろいろな価値観があり、いろいろな人たちがいるんだ』と新鮮な驚きがあり、自分は人生に出遅れているなと感じましたね」

変わったのは人生観だけではなかった。教科書を手にしてみると、人体の構造や生理など、書かれている内容はどれも科学的で知的好奇心を大いにかきたてた。看護の勉強は楽しい！　自分の知らない世界を知っている学友たち、そして実学の面白さ。佐竹さんは新しい環境にすっかり魅了され、5月の連休明けにはもう看護の道に進むことを決心したという。



看護学校では勉学はもちろんのこと、遊びにも熱中した。

「私の中には高校時代にはできなかった、いろいろなことを経験したいという気持ちが強くありましたし、周りの友達が不真面目な人ばかりで（笑）、授業をさぼっては映画館やコンサー

座談会

統括保健師に求められるもの

機能・役割・行政内の位置づけは？

統括保健師の必要性が叫ばれている。背景には、分散配置の浸透で保健師の地域全体を把握する力が弱まったこと、新任・現任教育が困難になってきたことへの危機感がある。しかし、その機能や役割の解釈は自治体により異なり、行政内での位置づけも一様ではない。

統括保健師の概念の整理を手始めに、求められる機能や役割、職位との関係などについて話し合ってもらった。

《司会》
公益社団法人地域医療振興協会
ヘルスプロモーション研究センター
島田美喜さん

九州大学大学院医学研究院
鳩野洋子さん

富士河口湖町
渡邉優子さん

東京都豊島区
栗原せい子さん

写真：カミヤス　セイ

ひよこ保健師 season 6

保健師の仕事は「つながり」があってこそ

人への感謝の心を持ち続けたい

小林亜里紗（こばやしありさ）さん
●清水町健康づくり課予防健診係

◀写真では分からないが、小林さんの声はアナウンサー並みによく通る。これもひとつの武器である。

◎文・写真
西内義雄
（医療・保健ジャーナリスト）

東京から新幹線こだまで1時間弱、JR三島駅で降り立つと間近に見事な富士山が見えた。さすが静岡だ。バスに乗り目的の清水町役場に向かうと、今度は町中なのに驚くほど美しい水をたたえる柿田川があった。

静岡で清水というとかつての清水市（現・静岡市清水区）しか知らなかっただけに、取材の目的など忘れ、すごい穴場を見つけた気分になっていた筆者である（笑）。

母の影響で看護の道へ

そんな自然の豊かな町で3年目を迎えるのが24歳の小林亜里紗さん。お隣沼津市の出身だ。通勤時間は車で15分というから、地元で就職したといっても過言ではない。母親が病院勤めの助産師。当然のことながら、保健師を目指した原点も母の影響があるようで

「母は私が生まれる前から助産師として働き、准看護師養成学校の先生を経て、再度助産師の現場に戻り今も現役です。やはり『手に職は強い！』と背中を見て思っていました」

なるべくして保健師になったことがよく分かる。ちなみに、これまでの取材経験では、ひよこさんの親のどちらかが公務員の確率はとても高く、母親が医療職というのもよく聞く。誰でも自由な職を得られる時代とはいえ、親の背中は偉大だと改めて感じた次第だ。

小林さんは、物心ついたころから母の現場での話をよく聞いていたので、興味の対象は最初から助産師か看護師になっていた。趣味は3歳から始めたピアノ。中学では音楽系の部活に入りたかったが、学校の規模が小さくて希望が叶わず、高校に入って念願の吹奏楽部に入った。吹奏楽部ではパーカッションを担当し、学園祭でドラムセットを叩いたり、アンサンブルコンテストで金賞を取ったりと、部活に打ち込んだ。一方で勉強も力を抜かずに取り組み、大学進学に備えた。

数学や化学が好きだったので薬学や医学に興味を持ちつつも、最後は看護学部に進むことを決意。あとはどこの大学にするか。

「最初は地元の大学との気持ちがありました。担任の先生から県外の大学を勧められ、外に出て学ぶのもいいかなと信州大学医学部保健学科看護学専攻を受験し、合格することができました。正直なところちょっと一人暮らしにも興味がありましたしね（笑）」

信州大学には助産師のコースがあったことも選んだ理由のひとつだった。

大学で気付いた保健師の魅力

信州大学の看護学専攻の本拠地は松本市だ。長野市より南にあるとはいえ、小林さんが思っていた以上に沼津から